優秀賞

◆優秀賞【小学生の部】

「信頼」という名の糸

三郷市立新和小学校　四年　村山　愛実

「今日から保育園で夕飯も食べてね。」

そう言って、お母さんは出産のため入院した。私はその五日間、学校が終わったら毎日保育園に行き、幼稚園帰りの弟と一緒に、お父さんの仕事が終わるのを待つことになった。いつもは、保育園の二階で私は習字を教わり、夕方お母さんがむかえにきてくれた。弟と夜までいるのはちょっと不安だった。

毎晩、園長先生が手作りの夕飯を出してくれた。大きなフライパンで、焼きそばや、お肉や野菜がたくさんのハンバーガーやチャーハンも作ってくれた。他にも園児や中学生が一緒に食べるので、色んな話をして楽しかった。しかも、おかわり自由だったので、おいしいご飯がたくさん食べられた。お母さんがいないさみしさも、五日間がまんできた。

ところが、それから何日もお母さんが帰って来ないので、保育園の夕飯がずっと続いていた。

そしてある日、ちょうど夕飯を食べている時に、園長先生のところにお母さんからメールが届いたようだった。それを読んだ後、

「愛実ちゃんのお母さん、えらいね。」

と言って、先生が涙を流した。私は何のことか分からなかったけど、あとでお母さんから、出産で命を落としかけて、大変な手術をして寝たきりになったことを伝えたと聞いた。園長先生はその時、弟と私がみんなと楽しそうに夕飯を食べている写真をお母さんにメールで送ってくれたそうだ。お母さんもそれを見て、ベッドの上で涙が止まらなかったと言っていた。先生には感謝しきれないとも言った。

園長先生は、弟と私にだけでなく、お母さんも大切に思って、優しいことをしてくれた。目には見えないけど、お母さんと先生は「信頼」という太く強い糸で結ばれてると感じた。私もお母さんみたいに周りの人に感謝の気持ちを忘れないようにしよう。そして困った時に助け合える仲間を大切にしようと思う。

◆優秀賞【小学生の部】

つなぐ一人へ

さいたま市立大久保東小学校　四年　山火　颯太

「ドンッドンッピーヒャラ」

日がくれておはやしの音が聞こえるようになると、お祭りはもうすぐです。ぼくの家の目の前には、大久保の大ケヤキがあってその横には神社があります。そこでおはやしを練習する地いきの人達がかっこよく見えて、ぼくは初めて見た時からあこがれていました。

二年生の夏、ぼくは勇気を出して、

「おはやしに入れてください。」

とおねがいをしに行きました。すると、おはやしのおじさん達は、やさしくぼくをむかえ入れてくれました。年れいは全然ちがうけれど、みんなで曲をかなでる仲間になれてうれしかったです。

おじさん達は何十年も昔から大久保りょう家に住み、おはやしをつづけています。地いきの

伝とうをずっと守っています。ぼくには太このたたき方やバチの持ち方、きれいな音の出し方などの技を教えてくれます。時には、地いきにおこった昔の出来事を聞かせてくれます。ふざけすぎてしまった時は、

「まじめにやりなさい。」

と注意してくれる事もあります。おはやしの技だけではなく、ぼくの心の成長も見守ってくれていると感じます。

ぼくは太この技をもっとみがきたいと思うようになりました。それから、この先大人になってもおはやしをつづけて、伝とうをつなぐ一人になりたいと思っています。

大切なことをたくさん教えてくれるおはやしのおじさん達に、ぼくは感しゃしています。

来年の夏がもう待ち遠しいです。

◆優秀賞【小学生の部】

初めて知った認知症

春日部市立武里西小学校　五年　本澤　樹梨

「これは、だれだっぺぇ。」

これは、私が茨城にあるお父さんの方のひいおばあちゃんの家に遊びに行った時、ひいおばあちゃんに言われた言葉でした。そして、私のお母さんにも、弟にも同じように聞くのでした。すると、いっしょに来たおばあちゃんが、

「まさひろ（お父さん）の娘。」

と言うと、

「あぁ、まさひろの娘かい。」

とうなずくのでした。お母さんと弟の事もそうやって、おばあちゃんが紹介するのでした。そんな時、会うのがほとんど冬なので、みんなでこたつに入っていると、ひいおばあちゃんが水羊羹をいつも私に出してくれるのです。

「食え、食いな。」
と言いながら。それが一番の楽しみでした。ですが、私が三年生になったぐらいの頃、ひいおばあちゃんは変わりました。名前も聞いた後何ども、何ども聞くし、水羊羹も出してくれなくなりました。その頃から少しして、きょ年ひいおばあちゃんは、老人ホームに行く事になりました。私は、そうなるまで、ひいおばあちゃんが〈認知症〉だという事は知りませんでした。最初は、ひいおばあちゃん家には、年に一度行くかくらいだったので、おぼえていないのも、しょうがないかなと思っていました。でも、会うたびに名前も教えてるのに、名前も顔もおぼえてくれなくて、なにか病気なのかなと思ったりしていました。

家族でひいおばあちゃんのいる老人ホームに行った時、何もしてあげられなかったけど名前を聞かれて、自分でこたえることができました。その時は思わなかったけど、今は、こう思います。おぼえてくれなくても、その時少しでも声を聞いてもらえてよかったなと。

今は、会うことも、ほとんどないと思うけど、長生きしてね。そう思っています。

◆優秀賞【小学生の部】

あこがれのお姉さんを目指して

さいたま市立北浦和小学校　五年　菅野　里咲

ある日の放課後、体育館でマーチングをのぞいた時、二才上のお姉さんを見つけました。そのお姉さんは、とても楽しそうに楽器をふいていました。私が一年生の時に、同じ児童クラブにいたお姉さんでした。「里咲ちゃん、里咲ちゃん」と私にいつも声をかけてくれて、身近なそん在でしたが、いつか一緒にマーチングをやってみたいと思うあこがれのそん在でもありました。

二年後、マーチングに入り、一緒にえんそうする事が出来る様になりました。私は四年生で、お姉さんは六年生でした。パートは同じトランペットでした。入部して気が付いた事は、お姉さんは楽ふを見ると、すぐふけるようにいつも練習していて、努力をしているんだと思いました。同時に、みんなに信頼されている部長でもありました。練習前にはランドセルをきれいにならべるよう注意したり、練習中にはみんなの足ぶみがそろっていない所に注目し声かけしていま

した。

今の私は、楽ふを見て覚える努力すらなかなか出来ません。だけど、あこがれだった当時のお姉さんに、私は近づきたいと思っています。また目標である「ディズニーシーでのえんそう」を達成させたいと思っています。そのために、まずは何度も練習して楽ふを覚えるように努力すること、パートのみんなと声をかけあうこと、そして身の回りの整理整とんをすることを心がけています。そして自分自身の事が出来るようになったらマーチングのモットーである「音」と「仲間」を大切に、これを実現させるために周りの人を引っ張っていけるようになりたいです。私はだれとでも仲良く話して、一回一回の練習を大切にして先生が教えてくれたことが出来る様にしていきたいです。そうすることで、あこがれだったお姉さんに近づき、私の夢を実現させたいです。

◆優秀賞【小学生の部】

ニコニコ応援団

戸田市立芦原小学校　六年　山下　仁子

私の名前の由来はニコニコ笑顔になるようにとこめられています。それなのに性格は人見知りで泣き虫でした。実は私はそんな私が好きではありませんでした。名前にふさわしい人になりたいと思っていました。

五年生の時、運動会の応援団で活躍する友達のかっこいい姿を見てあこがれました。六年生になったら私も絶対やると心に決めました。

六年生になり、運動会の係を決めました。やっぱり恥ずかしいなと一瞬迷いました。ドキドキしながら応援団に立候補しました。クラスのみんなが拍手してくれました。応援団の私がクラスのみんなから応援してもらいました。白組のためにがんばろうと決意しました。

応援団の練習が始まりました。初めてのことがいっぱいありました。大勢の前で今まで出したことのないような大きな声で発表しました。休み時間も毎日練習で大変でしたが、オリジナ

ルの応援歌も作ってふりつけを考えたり楽しかったです。はじめは応援団が私につとまるか不安でしたが、恥ずかしいとか無理だとあきらめたくありませんでした。

運動会当日、応援団みんなで円陣を組みました。勇気がわいてきました。一生懸命応援しました。緊張している下級生には優しく応援しました。すると笑顔でがんばってくれました。みんなの役に立てて私もとてもうれしかったです。

白組は負けてしまったけれど、不思議と悔しくはありませんでした。白組の仲間はがんばっていたからです。達成感がありました。

初めてのことに勇気を出して挑戦したら、一生の宝物になりました。そして、新しい発見がありました。私は周りの人を笑顔にする存在と気がつきました。自分の名前にふさわしい人間に一歩近づきました。

◆優秀賞【小学生の部】

感謝と成長のエピソード

朝霞市立朝霞第一小学校　六年　織原　佑光

ぼくには四人のおばあちゃんがいます。二人は本当のおばあちゃんで、あとの二人は近所のおばさんです。

ぼく達は双子で小さく生まれてしまいました。大きくなるまで入院していたそうです。退院した時は「うれしかったけれど不安の方が大きかった。」とお母さんが言っていました。

そんな不安がっていたお母さんを助けてくれたのは近所のおばさんです。毎日のように家に来てくれてお風呂に入れてくれたり、お散歩に連れて行ってくれたり、ミルクをくれたり、お母さんと同じような事をしてくれたそうです。

お母さんとおばあちゃんが頼んだのではなく、進んで毎日ぼく達の世話をしてくれたそうです。そのおかげでぼく達は大きなケガや病気もしないでここまで大きくなりました。

なかなかおばさん達と会う事が出来なくなったけど、会うと「大きくなったね。」と言って

ぼく達のかたをポンポンたたいて喜んでくれます。おばさん達よりぼく達の方がいつの間にか大きくなっていました。

そんな元気なおばさん達も、足腰が弱くなったり病気になって、あまり目が見えなくなったそうです。

今度はぼく達が進んで助ける番です。重たい荷物も持ってあげたり、車どおりがはげしい道ではいっしょにわたったり、買い物に行ってあげたりと、今までしてもらった事をたくさんしていこうと思います。そしていつまでも元気でいてもらって、会った時に笑顔でまた会いたいです。

◆優秀賞【中学生の部】

優しさと伝統の継承

秩父市立秩父第一中学校　一年　矢島　羽菜

私の住んでいる地域には、「秩父川瀬祭」という祭りが七月十九日二十日の二日間開催されます。冬の秩父夜祭に対する夏の秩父川瀬祭として知られています。この祭りは「子供が主役の祭り」とされていて、拍子木や山車の最前部に乗るのは小学生です。私の住む町内にも山車（だし）があり、私も小学三年生から拍子木で参加し、小学五年六年は囃子手として屋台に乗りました。そして中学生になった今年は子供係としてお祭りに参加しました。子供係は、拍子木の小学生達の先頭に立って誘導したり、拍子木の声かけをしたりして祭りを盛り上げるのが仕事です。

私には弟が二人います。上の弟は小学五年生で、囃子手（はやして）として参加しました。しかし、下の弟はまだ小学校一年生なので、お祭りでは山車の綱を引く曳き手としてしか参加することができません。曳き手は綱の外側から綱を持ち、拍子木の小中学生は綱の内側で拍子木を打ち鳴らします。外側にいる弟からは、内側にいる拍子木の子達がとっても楽しく見えたようで、私の

持っている拍子木を触ったり休憩中に鳴らしたりしていました。しかし、屋台の運行中に屋台の周りに見物の人が増えた時、小さい弟は危ないので少しだけ綱の内側に入れて歩いたりしました。そうすると弟はよほど嬉しかったようで目をキラキラと輝かせていました。そして、そんな弟を見た六年生の男の子が

「オレと弟は小学校の遠足で同じグループで仲良しなんだ」

と言い、自分の拍子木を弟の首に掛けてくれました。弟はとても満足そうな顔になっていました。拍子木を鳴らしてみるように男の子に言われた弟ですが、リズムが難しくうまくできませんでした。すると、男の子が弟の後ろに行き、手を持って一緒に拍子木を打ち鳴らしてくれました。「カチカチ」思ったよりもよい音が響き、弟の顔は笑顔でいっぱいになりました。それを見て私は、男の子の優しさはもちろんですが、弟は、学校でもこのように様々な人に支えられて、優しさいっぱいの中で学校生活を送っているのだと感じ安心しました。

そして、この様子を見てもう一つ思った事があります。それは、こうやって人から人へと「伝統」が継承されていくということです。伝統ある秩父川瀬祭ですが、何百年も続くには、人と人が支え合う中で、優しさと時には厳しさが共に人から人へ伝わり、後世へと残されていくのだと実感させられました。高学年の男の子が低学年の男の子に打ち方を教える、こんな小さなことですが、これは立派な「指導」であり、伝統の継承です。

私は昨年まで主役として参加していたこのお祭りに、今年は違う立場で参加させてもらいました。これから先もずっと、この祭りに参加していくつもりです。そして小学校の子達に今までの経験を通して得た事をしっかり伝えていきたいと考えました。この支え合いを通じて、少しでも秩父の大切な伝統あるお祭りを残していくお手伝いができればいいと強く感じた今年の川瀬祭でした。

◆優秀賞【中学生の部】

みんなの気遣い

さいたま市立植水中学校　一年　筌口　心結

私は、小学六年生の一月に足の手術をしました。手術後は、スムーズに歩くことが困難になり、リハビリが必要となりました。初めてのリハビリでは、歩くことが怖く、痛みがあったためなかなか一歩がでませんでした。しかし、リハビリの先生が「大丈夫だよ」とやさしく励ましてくれたことで頑張ろうと思いました。リハビリの先生や看護師さんに支えられ、二ヵ月の入院生活をすごしました。そして、三月に卒業式を迎えることができました。けれども私は、ゆううつな気持ちになりました。なぜなら、スムーズに歩けない姿を見られたくなかったからです。でも、みんなが温かく迎えてくれたことで、不安がなくなり自然と笑顔になりました。

まだ、普通に歩くことが出来ない私は、杖を使っての中学校生活をスタートしました。自由に歩けない私にとっては予想以上に大変でした。教室への移動に時間がかかり、授業の初めに間に合わないこともあります。給食の配膳や給食当番は出来ないので友達に助けてもらってい

ます。美術の時も、パレットを自分で洗うことができないので友達が洗ってくれます。このように、出来ないことが多く友達に助けてもらうばかりでもうしわけない気持ちでいっぱいです。そして、みんなと同じようになりたいと気持ちが焦ります。けれども、みんないつも、当たり前のように、「大丈夫？」「手伝おうか？」と声をかけてくれてます。私はいつも、みんなのやさしさで、救われています。

歩けないことで、色々不便さを感じ、当たり前にできることは、幸せなんだと実感しました。私は今、友達や先生などたくさんの人に支えてもらい楽しくすごせています。人はみんな一人では生きていけません。だから、自分に何が出来るか考え、みんなを笑顔にする人になりたいです。日頃支えてもらっているみんなに対して、感謝の気持ちを忘れずに、私も誰かの支えになりたいと強く思います。

◆優秀賞【中学生の部】

言葉の伝わり方

久喜市立久喜中学校　二年　木村　柚

「ありがとう。」という言葉は言っても言われても良い気持ちになります。私は「ありがとう」と言われ、とっさに「ありがとう」と返してしまったことがあります。別に言わなくてもいいはずなのに口からポロッと出てきました。これは私が小学生のころ体験した話です。

いつも私はゴミ捨ての当番でお母さんに頼まれ、朝、ゴミを捨てにいっていました。すると毎朝ゴミ捨て場を掃除してくれているおばあさんがいました。そのおばあさんは、私と会うたびに、「えらいね」とほめてくれます。私は、掃除をしてくれていることと、ほめてくれたことの二つの意味を込め「ありがとうございます」と言いました。するとおばあさんはとても嬉しそうな顔をして会しゃくをしました。私はその顔がとても好きで言ったこっちも嬉しい気持ちになりました。しかし、次の日、ゴミ捨てに行くとおばあさんはいませんでした。あとから聞いたら、体調をくずしてしまったそうです。おばあさんがいないことを不思議に思いながらゴ

ミを捨てようとすると、ゴミ捨て場がとても汚いことに気がつきました。空き缶が散らばっていたり、ゴミがふくろから出ていたりしていました。私はとても驚きました。いつもはとてもキレイだったのにと思いました。私はそれから、おばあさんのありがたさがよくわかりました。それから一週間、おばあさんは来ませんでした。だから、私はおばあさんの代わりをしようと思いました。いつもより早く起きてゴミ捨て場に行き、掃除をしました。私がいるのにペットボトルなどをポイ捨てする人もいましたが、私はまだ小さかったため大人に注意をするということはできませんでした。そして一週間後、おばあさんは体調を元に戻していました。またおばあさんに会えるんだと思いながら、おばあさんの代わりをしてみてどうだったかも伝えたいとも思っていました。次の日の朝いつものようにゴミ捨て場にいくとおばあさんがいて、私にこう言いました。

「本当にありがとう。ここを私がいない間、キレイにしてくれたんだよね。」

私はとっさに「ありがとうございます。」と言いました。言おうとも思っていなかったのでおどろきました。多分、おばあさんの心の込もった感謝を聞いて自分も返したくなったんだと思います。

私はこのことを大切だと思います。今、私の周りは適当な気持ちで「あざす」などと、言っている人が多く見られます。そんな感謝では、返したくなんてならないでしょう。私はとっさ

に出たあの「ありがとう」こそが、相手の思いが伝わっている証拠だと思います。だからこそ色々な人にこの気持ちを知ってほしい。軽い気持ちで言う感謝なんて言っても言われても嬉しい気持ちになんてならないから。

◆優秀賞【中学生の部】

言えなかったありがとう

八潮市立八條中学校　二年　和井田　夢咲

私が住んでいる地域には、「パトロール隊」があります。このパトロール隊に私は、とてもお世話になりました。

小学校に入学した頃の私は、一人で帰るのが寂しくて嫌でした。下校時間になり、学校の外に出るとそこにはいつも、蛍光黄緑の服を来たおじさん達がいました。そのおじさんは「今日の学校どうだった？」など、優しく話しかけてくれ、家まで送ってくれました。私は後から知りました。あのおじさんがパトロール隊であることを。

パトロール隊とは、地域の子供達を見守ってくれる方達です。雨の日も、風の日も、暑い日だって、寒い日だって、いつも私たちの登下校を見守ってくれました。そんなパトロール隊に、いつ頃からか感謝の気持ちを持つようになっていました。小学三年生の三月、私は荷物をたくさん抱えながら学校から帰っていました。それを見たパトロール隊の方が、「持ってあげるよ。」

と優しく声を掛けてくれました。人に荷物を持ってもらうのは悪いなと思ったのですが、その方は家まで荷物を持ってくれたのです。「ありがとうございます。」と言いたかったけれど、その日は言うことができませんでした。それから私はパトロール隊の方々にお世話になりながら、小学六年生になりました。毎年三月にパトロール隊の方達に日頃の感謝を伝える会、「ありがとう集会」という会が行われます。私はこの会で、お世話になった地域の方々に感謝の気持ちを伝えようと決めていました。そして六年生が挨拶をする番になりました。学校で育てたパンジーと一緒に、「いつも優しい言葉を掛けてくれたり、毎日登下校を見守ってくれたりしてありがとうございます。」と、やっと伝えることができました。このときの嬉しい気持ちとパトロール隊の方の笑顔が忘れられません。そして何より、「パトロールやっててよかったなぁ。昔は小さかったのに、随分大きくなったなぁ。」という言葉に涙が溢れそうになりました。

中学二年生になった今、パトロール隊の皆さんと深く関わることは少なくなりました。しかし、今も変わらず、あの場所にいる方達に、毎朝挨拶をしてから登校しています。

この出会いを通して、地域の方の関わる大切さを知ることができました。これまでの出会いを大切にしながら、これからはボランティア活動等にも積極的に参加して、地域との関わりを大切にしていきたいです。

◆優秀賞【中学生の部】

私にできることは…

白岡市立篠津中学校　三年　佐久間　葵

「デイサービスセンターか…。」

二年生の十二月、学校の行事の一環として職業体験が行われた。私は生き物が好きなので本当は動物園に行きたいと思っていた。だから、希望欄を埋めるために書いたデイサービスセンターに決まり、正直少し残念に思った。

家に帰り、母にデイサービスセンターに決まったことを伝えたら、

「おばあちゃんが働いているところに似ているよ。」

と言われた。早速祖母にもこのことを伝えたら、大変な仕事を選んだね、と言われた。私はとたんに不安な気持ちがこみ上げてきた。でも、決まったからには全力でやるしかない。

覚悟を決め、私は職業体験に向けて準備を始めた。デイサービスは高齢者が二十四時間滞在している老人ホームとは違い、日帰りで好きな日に利用する仕組みだそうだ。基礎的なことを

あらかじめ調べておき、体験初日を迎えた。中学生の私達がする仕事は、会話をしたり、食事の配膳をしたりといった、利用者の方とのコミュニケーションをとるものが中心だった。私は話すことが大好きだし、配膳も普段の学校生活で慣れているので、簡単にできると思っていた。しかし、実際に利用者の方と話してみたら、私の声が全然聞こえていなかったり、さっきしたばかりの話をまた最初から話してくださったり、今まで経験したことがないようなことが立て続けに起こり焦った。だから、夕方には、心身ともに疲れ果ててしまった。

二日目、私は工夫して話すことに決めた。ジェスチャーを加えたり、ゆっくりはきはき話したりすることで、昨日よりもうまくコミュニケーションがとれるようになった。センターのスタッフの方には、「聞き手に回る」ことが大切だというアドバイスをいただいた。実践してみたら、昨日のことがまるで嘘のように会話が弾んだ。さらに、笑顔で話すことを心がけたら、相手の利用者の方も笑顔で話をしてくれるようになった。さらに、大勢の方が会話に加わってくれた。私は、このことが言葉には表せないくらい嬉しくてたまらなかった。

四ヶ月後、今度は私の所属している吹奏楽部でまた訪問し、演奏を聴いていただく機会があった。私は率先して司会に立候補した。職業体験で学んだことを生かし、精一杯司会を務めた。すると、演奏後利用者のある方が

「とても聞きやすい良い司会だったよ。」

と、声をかけてくださった。私は、心から嬉しかった。

私はこの職業体験を通して、相手のことを考えながら自分にできることをすることは、自分も相手も温かい気持ちになることを知った。周りの人を大切にし、自分自身も幸せに感じる生き方をこれからも貫いていきたい。

◆優秀賞【中学生の部】

信頼関係から成るボランティア活動

白岡市立篠津中学校　三年　本澤　未悠

「こんにちは」

母と病院に行った日のことです。待合室で、近所に住むおばあちゃんから、声をかけられました。私と母は慌てて

「こんにちは」

と、返しました。そのおばあちゃんには、二人のお子さんがいるそうですが、結婚されてお二人共他県に住んでいるそうで、今は一人暮らしです。その日は車椅子に座っていたので、どうやって病院に来たのだろう、この間まで、元気に庭の草取りや掃除をしていたのに、と心配になりました。少しすると、今度はそこに近所のおばさんが来ました。どうやらそのおばさんが、おばあちゃんを、車で病院まで連れて来たようです。毎月一回お薬をもらいに来ていて、車椅子に座っていたのは、早く歩けなくて、他の人に迷惑をかけるからだったのです。それを知って、

私はほっとしました。と同時に、おばあちゃんを連れて来たおばさんは、とても親切な人だと思いました。

数日後、今度はスーパーでお二人に会いました。一緒に買い物をしていました。いつもお手伝いをしているおばさんは、本当に親切な人だと思い、母におばさんのことをきいてみました。そのときそのおばさんが、民生委員さんだと聞きました。民生委員さんとは、どんな人でどんな事をする人なのだろうと、興味がわきました。調べてみると、非常勤の公務員で、地域住民の身近な相談相手、支援を必要とする人の援助をする人とありました。例えば、子育てに関して困ったり、悩んだりした時に、相談にのってあげたり、障害をもっている人、高齢者で一人暮らしをしている人が、生活していく中で困っている時、できない事をお手伝いしてあげたり。ボランティア活動に、理解し熱意をもてる人が選ばれる対象になるということです。おばさんは正に、素晴らしい民生委員さんだと感じました。以前私もボランティア活動に参加した事があります。イベント会場の後かたづけや、ゴミ拾いなどです。今回の事で、ボランティア活動とは内容も色々で、奥が深いと実感しました。このおばさんのボランティア活動は、人と人との信頼関係から成るものだと思います。お願いする人は、相手の方を信頼しているから頼む事ができ、反対にお手伝いする人は、相手の方の少しでも役に立つお手伝いをしてあげたいという思いから、親身になって活動する事ができ、それも同じ地域に住んでいて、お互いが知って

いるからこそ、成り立つものだと分かりました。

最近あのおばあちゃんは、体調をくずして入院しているそうで、家の庭の草がのびてしまっています。退院してきたら、きっとおばさんは手伝いに行くでしょう。私もいつか人と人との信頼から成るボランティア活動に参加して、お手伝いがしたいと思います。